〔原著〕

ヒト歯肉線維芽細胞におけるCa²⁺/陽イオン交換体遺伝子の発現解析

蓑輪 映里佳^{1)*}, 金久保 千晶^{1)*}, 仙葉 慎吾²⁾, Rezon Yanuar²⁾, 倉重 圭史¹⁾, 齊藤 正人¹⁾, 谷村 明彦²⁾

北海道医療大学歯学部 口腔構造・機能発育学系 小児歯科学分野
2) 北海道医療大学歯学部 口腔生物学系 薬理学分野
*著者の蓑輪映里佳と金久保千晶は、本研究に等しく貢献した

Expression analysis of Ca²⁺/cation antiporter genes in human gingival fibroblasts

Erika MINOWA^{1)*}, Chiaki KANAKUBO^{1)*}, Shingo SENBA²⁾, Rezon YANUAR²⁾, Yoshihito KURASHIGE¹⁾, Masato SAITOH¹⁾, Akihiko TANIMURA²⁾

1) Division of Pediatric Dentistry, Department of Growth and Development,

School of Dentistry, Health Sciences University of Hokkaido

2) Division of Pharmacology, Department of Oral biology, School of Dentistry, Health Sciences University of Hokkaido *Erika Minowa and Chiaki Kanakubo authors are contributed equally to this study.

Key words : Na^{+}/Ca^{2+} exchangers, K^{+} -dependent Na^{+}/Ca^{2+} exchangers, $Ca^{2+}/cation$ exchangers, Human gingival fibroblast, Phenytoin

Abstract

Gingival overgrowth induced by phenytoin is thought to be associated with Ca2+ signaling. Our previous study revealed that phenytoin suppressed the Na⁺/Ca²⁺ exchanger (NCX) which was one of the Ca²⁺ excretion mechanisms in human gingival fibroblasts (HGF), resulting in inhibition of Ca2+ efflux and increasing intracellular Ca2+ concentration ([Ca²⁺]_i) of HGF. However, the expression of the Ca²⁺/cation antiporter (CaCA) superfamily, including the NCX, in HGF is unknown. In the present study, therefore, the CaCA superfamily expressed in HGF was examined to determine the mechanism by which phenytoin increases [Ca²⁺]_i. End-point PCR analysis showed clear expression of NCX1 in HGF, but not NCX2 or NCX3. Furthermore, weak expression of NCKX1 and NCKX3, the K⁺-dependent Na⁺/Ca²⁺ exchangers, and NCLX, a mitochondrial NCX, was observed. Realtime quantitative PCR results were used to further investigate the relative expression levels of these CaCAs.

緒言

フェニトインは抗てんかん薬として広く使用されており、主に神経細胞膜の電位依存性Na⁺チャネルを阻害す

The relative expression levels of NCX1, NCKX1, and NCKX3 to housekeeping gene GAPDH expression were 2% ± SE 0.5%, 0.3% ± SE 0.05%, 0.4% ± SE 0.07% and $0.1\% \pm SE 0.05\%$, respectively. From these results, the members of the CaCA superfamily present in the plasma membrane of HGF were estimated to be NCX1, NCKX1, and NCKX3, which accounted for 76.2%, 17.7%, and 6.1% of the total, respectively. The expression of NCX2 and NCX3 was not confirmed, but the expression of NCLX was confirmed. These results suggest that NCX1 is the major component of the CaCA superfamily on the plasma membrane of HGFs. The present study suggests that phenytoin primarily suppresses NCX1, leading to an increase of [Ca²⁺]_i in HGF. NCLX, NCKX1, and NCKX3 are also thought to be suppressed by phenytoin and partially contribute to [Ca²⁺]_i dynamics in HGF.

ることで脱分極を抑制すると考えられている(Rogawski & Löscher, 2004).フェニトインの副作用で, 歯肉増殖 がみられることがあり(Kimball, 1939), 服用者の約 50%に発症するとされている(Kataoka et al., 2005).同 様に、歯肉増殖は免疫抑制剤であるシクロスポリンAや カルシウム拮抗剤であるニフェジピンの副作用としても 認められ(Kataoka et al., 2005),薬剤性歯肉増殖症 (DIGO)と呼ばれている.しかし、その原因解明には 至っていない(Brown & Arany, 2015; Sabarudin et al., 2022).

DIGOの発症機序において、ヒト歯肉線維芽細胞 (Human Gingival Fibroblasts: HGF)を用いた研究から、 DIGOの発症には細胞増殖の亢進やアポトーシスの抑制 によるHGF数の増加(Sano et al., 2004; Kantarci et al., 2007),コラーゲン合成促進やコラーゲン分解の抑制に よる結合組織の蓄積が関与することが示唆されている (Kataoka et al., 2005; Brown & Arany, 2015; Hassell, 1982: Kantor & Hassell, 1983).

フェニトイン,シクロスポリンA,ニフェジピンの化 学構造や固有の薬理作用はそれぞれ異なるが,これらの 薬剤はいずれも細胞内Ca²⁺濃度($[Ca^{2+}]_i$)の動態に影響 を及ぼし, $[Ca^{2+}]_i$ の上昇がDIGOの引き金になると提唱 されている(Hattori & Wang, 2008; Hattori et al., 2011; MODÉER et al., 1991; Hattori et al., 2013 Hattori et al., 2012; López–González et al., 2017; Pfeilschifter & Rüegg, 1987). Ca²⁺は普遍的なセカンドメッセンジャーとし て,多様な細胞機能の調節に関与する(Clapham, 1995). 細胞質のCa²⁺濃度は、様々な生理活性物質に よって細胞が刺激を受けると細胞膜や細胞内Ca²⁺貯蔵部 位(Ca²⁺ストア)のCa²⁺灰出あるいはCa²⁺流入 によって急激に上昇する(Leybaert & Sanderson, 2012). これらの細胞反応は Ca^{2+} シグナリングと呼ばれており, 細胞運動,神経活動,分泌などの比較的早い反応を制御 することが知られている(Wiegert & Bading, 2011).さ らにこれらの Ca^{2+} シグナルが増殖や遺伝子発現制御など に関連していることが明らかにされつつある(Cockcroft, 2006; Somlyo & Himpens, 1989; Tanimura et al., 1998; Yamashita et al., 2000). $[Ca^{2+}]_i$ は静止状態におい て, Na⁺/Ca²⁺交換体(NCX)と細胞膜Ca²⁺ – ATPase (PMCA)を介したCa²⁺の細胞外排出と、サルコ/小胞体 Ca²⁺ – ATPase (SERCA)を介したCa²⁺ストアへの取り込 みによって,約100 nMの低レベルに維持されている

(Clapham, 2007). HGFのような非興奮性細胞における Ca²⁺シグナルは, G_{q11}タンパク質共役型受容体と受容体 チロシンキナーゼとの相互作用による, イノシトール三 リン酸 (IP₃) 受容体を介した, 細胞内貯蔵からのCa²⁺放 出によって惹起される (Berridge, 2009; Clapham, 2007; Bagur & Hajnóczky, 2017). これまでにヒスタミン, ブ ラジキニン, またはトリプシンによるGタンパク質共役 型受容体 (G protein-coupled receptor : GPCR) の活性化 が, IP₃依存的な細胞内貯蔵からのCa²⁺放出を介して, HGF細胞の[Ca²⁺]_iを活性化することが示されている

(Ogata et al., 2003 ; Tanaka et al., 2004).

フェニトインによる[Ca²⁺]_i上昇のメカニズムについて は未だに解明されていないものの,我々の先行研究に よって,フェニトインがHGF細胞膜上のNCXsの阻害に よって[Ca²⁺]_iを上昇させる可能性が示唆された(Minowa et al., 2023). Ca²⁺輸送性交換体のひとつである NCXは,細胞内外のNa⁺濃度勾配を駆動力として,細胞



図1 細胞におけるCa²⁺排出機構

[Ca²⁺],は静止状態において、NCXやNCKX、およびPMCAを介したCa²⁺の細胞外排出と、SERCAを介した細胞内ストアへの Ca²⁺の取り込みによって約100 nMの低レベルに維持されている. Ca²⁺輸送性交換体は、CaCA遺伝子のスーパーファミリーを構成しており、細胞膜上にはNCX1、2、3およびNCKX1、2、3、4、5が、ミトコンドリアにはNCLXが存在している. HGF等の 非興奮性細胞では、細胞膜に存在するGPCRを介するCa²⁺シグナリングがよく知られている. GPCRが活性化すると、PLCがPIP₂ を切断して、IP₃を生成する. このIP₃が小胞体のIP₃受容体と結合し、Ca²⁺が小胞体から放出する. 内のCa²⁺を細胞外へ汲み出すことで[Ca²⁺]_iを低く保って いる(Brini & Carafoli, 2011).従って,NCXの抑制は, 細胞内Ca²⁺の細胞外への排出を抑制することによって [Ca²⁺]_iの上昇を引き起こす.またNCXは,細胞外液の Na⁺除去によるNa⁺濃度勾配の逆転によって逆回転を起 こし,細胞外から細胞内へCa²⁺を流入させることが知ら れている(図1).

Ca²⁺輸送性交換体は、Ca²⁺/陽イオンアンチポーター (CaCA) 遺伝子のスーパーファミリーを構成しており. そのうち哺乳類ではNCX, K⁺依存性Na⁺/Ca²⁺交換体 (NCKX), ミトコンドリアNa⁺/Ca²⁺交換体 (NCLX) を含 むCCXが発現している (Hassan & Lytton, 2020). また NCXにおいては、NCX1, 2, 3の3種類のメンバーが同 定されており、NCX1は心臓、脳、腎臓、血管をはじめ とする種々臓器に普遍的に発現し、NCX2とNCX3は主 に脳、骨格筋に発現している (Iwamoto, 2004). NCXに 加えて細胞膜上に存在するCa²⁺排出機構であるNCKXは 5つの遺伝子からなるトランスポーターファミリーであ り, Na⁺, Ca²⁺, およびK⁺を4:1:1.30の比率で輸送す る (Hassan & Lytton, 2020). NCKXは, 主に神経細胞の Ca²⁺輸送において重要な役を果たし、NCKX1の発現は主 に桿体光受容体,NCKX2の発現は錐体光受容体を含む ニューロンで発現する.NCKX3は脳の他に大動脈,

肺,腸など平滑筋での発現が示唆され,NCKX4も脳お よび大動脈に豊富に存在する(Hassan & Lytton, 2020; Lytton et al., 2002).NCKX5は主に色素細胞で発現する とされるが(Williams et al., 2017),他のNCKXファミ リーメンバーとは異なりゴルジ体に関連する細胞内膜で 発現しているとの報告がある(Ginger et al., 2008).さ らにATP合成を司るミトコンドリアのNa⁺/Ca²⁺の交換体 であるNCLXは、ミトコンドリアから細胞質内への主要 なCa²⁺排出系を担っている(Hassan & Lytton, 2020)(図 1).これらのCaCAスーパーファミリーは、細胞内の Ca²⁺ホメオスタシスやCa²⁺シグナル動態に大きく寄与し ているとされているが、HGFにおいて発現するCaCAの 種類やサブタイプは明らかにされていない.

本研究では、フェニトインによる[Ca²⁺]_i上昇のメカニ ズムをより詳細に検討するために、HGFにおいて発現す るCaCAスーパーファミリーのサブタイプを明らかにす ることを目的とした.

材料および方法

1 細胞および培養

正常ヒト歯肉線維芽細胞 (Cell Line Service, Eppelheim, Germany), およびヒト神経芽細胞腫 (SH-SY5Y, German collection of Microorganisms and Cell Cultures, Braunschweig, Germany) をそれぞれ60 mm Tissue Culture Dish (AGCテクノグラス, 静岡, 日本) に播種 L, 2%Penicillin-Streptomycin (PS: Thermo Fisher scientific, Waltham, USA), 2 mM L-Glutamine (L-Glu : Thermo Fisher scientific, Waltham, USA), 10% fetal bovine serum (FBS: Biowest, Nuaille, France) 含有Dulbecco's Modified Eagle Medium low glucose (DMEM : Sigma-Aldrich, St.Louis, USA) を使用し、37℃, 5%CO₂ にて培養し、80%コンフルエントに達したものを使用し た. ヒト胎児腎 (human embryonic kidney: HEK) 293 FT細胞 (Thermo Fisher Scientific, Waltham, USA) を60 mm Tissue Culture Dishに播種し、1%PS、6 mM L-Glu, 0.1 mM MEM Non-Essential Amino Acids (NEAA : Thermo Fisher scientific, Waltham, USA), 1 mM MEM Sodium Pyruvate (Thermo Fisher scientific, Waltham, USA), 10%FBS含有DMEM high glucoseを使用 し、37℃、5%CO2にて培養し、80%コンフルエントに達 したものを使用した. なお、SH-SY5YおよびHEK293 FTに関しては各プライマーの有効性を確認するために 使用した.

2 プライマーの設計およびmRNA発現解析

RNeasy mini Kit (Qiagen, Hilden, Germany) を用いて total RNAを抽出後, ReverTra Ace[®] qPCR Master Mix (TOYOBO, 大阪, 日本)を用いてcDNAを作製した. 得られたcDNAをconventional PCRおよび電気泳動, なら びにSYBR Green法によるReal-time PCRにより解析し た. 使用するプライマーはPrimer-BLASTを用いて設計 した (表1).

エンドポイントPCRには、GoTaq[®] Green Master Mix (Promega, Madison, USA)を用いた. PCRはTaKaRa PCR Thermal Cycler Dice[®] Touch (タカラバイオ、滋 賀、日本)を使用し、すべてのPCR条件は95[°] 2minの プレヒーティング後に、95[°] を20 sec、60[°] を20 sec、72[°] を20 secの34サイクルを行い、72[°] 5min反応さ せた後、4[°] まで冷却した. 増幅したDNAをエチジウム ブロマイド含有1.5[°] アガロースゲル上で電気泳動し、 UV照射して検出した.

次に, Real-time PCRはKAPA SYBR[®] FAST qPCRキッ ト (ABIPrismqPCR)(Sigma-Aldrich, St.Louis, USA) を 使用し, Applied Biosystems StepOnePlus (Thermo Fisher Scientific, Waltham, USA) にてReal-Time qPCRにより, mRNAの発現解析を行った. また,内的標準としてヒト GAPDHを使用した. Real-Time qPCRにて検出されたCt

Target gene	Primer	Sequence $(5' \rightarrow 3')$	Tm (℃)	Amplicon length (bp)
SLC8A1	H_NCX1 Fwd	CGCACTTGGAACATCAGTGC	60.11	193
(NCX1)	H_NCX1 Rev	GCCAGGGGGACACTTTGAACT	60.18	
SLC8A2	H_NCX2 Fwd	AGAGATGGGCAAGCCAGTTC	60.03	268
(NCX2)	H_NCX2 Rev	CACCTTCCAGAACACCGTCA	59.89	
SLC8A3	H_NCX3 Fwd	TTCCTGGAGGGACCAGTTCA	60.1	73
(NCX3)	H_NCX3 Rev	CCCGGATTCATCCTCATCCTC	59.72	
SLC8B1	H_NCLX Fwd	GCTCACATTAGCCCCCAGTT	60.03	172
(NCLX)	H_NCLX Rev	AGTGGCAGAAGATGCCTTCC	60.03	
SLC24A1	H_NCKX1 Fwd	CTTCCTTCTGCCCATCGTGT	60.04	267 (177)
(NCKX1)	H_NCKX1 Rev	ATGTCTCCCAGGCCTTTTCG	60.04	
SLC24A2	H_NCKX2 Fwd	CTGAAACCCGCAAGCAAGTC	60.04	253
(NCKX2)	H_NCKX2 Rev	AGATCAGGGATGGAGGTCCC	60.1	
SLC24A3	H_NCKX3 Fwd	GCAGGTGAACGACACTCTGA	59.97	176
(NCKX3)	H_NCKX3 Rev	CAATGGCCAGCGCATAGAAC	59.97	
SLC24A4	H_NCKX4 Fwd	AGTATGGCAAGAACCCCGTG	60.04	206
(NCKX4)	H_NCKX4 Rev	TTGAAGCGGCTTACTGCTCA	59.97	
SLC24A5	H_NCKX5 Fwd	ACCATCCTTGGATCTGCAATTT	58.28	297
(NCKX5)	H_NCKX5 Rev	CATAGCTTTGGCAAGACAGGC	59.87	
Human GAPDH	H_gapdh Fwd	TTCGTCATGGGTGTGAACCA	67.6	287

CCGTTCAGCTCAGGGATGAC

67.1

表1 PCR解析に使用したプライマー

値は,独立した4回の実験の平均と標準誤差で示した. ただし,Excel®統計2006(社会情報サービス,東京,日本)による検定で「外れ値」と判断されたデータは除外した.

H_gapdh Rev

結 果

 Conventional PCRによるNCX1, 2, 3の遺伝子発現 HGF, SH-SY5Y, およびHEK293FTにおけるNCX1, NCX2, NCX3, GAPDHのmRNA発現を各ターゲット遺 伝子の特異的プライマーを用いてconventional PCRによ り増幅したサンプルを使用し電気泳動法により検出した (図2). HGFでは, NCX1の発現を検出したものの, NCX2およびNCX3の発現は検出されなかった. そこ で,これらのプライマーを用いてヒト神経芽細胞腫であ るSH-SY5Y細胞に発現するNCXの種類を確認したとこ ろ, NCX1, 2, 3すべての発現が確認された. またHEK 293FTでは, NCX1およびNCX2の発現が検出されたが, NCX3の発現は検出されなかった(図2).

Conventional PCRによるNCLXおよびNCKX1, 2,
4,5の遺伝子発現

HGFにおけるNCX以外のCaCA発現を検討するため に, conventional PCRにより, NCLX, NCKX1, NCKX 2, NCKX3, NCKX4, NCKX5を検出した. HGFにおい ては, NCLX, NCKX1に加えてごく僅かなNCKX3の発 現が確認された. SH-SY5Yにおいては, NCLX, NCKX 1の発現が検出された. HEK293FTにおいては, NCLXお







図3 Conventional PCRによるNCLXおよびNCKX1, 2, 3, 4, 5の遺伝子発現

HGFにおいては、NCLX、NCKX1に加えて僅かなNCKX3 の発現が確認された.SH-SY5Yにおいては、NCLX、NCKX 1の発現が検出された.HEK293FTにおいては、NCLXおよび NCX1, 2, 4の発現が検出された.



図4 HGFにおけるCaCAファミリーの遺伝子発現 HGFにおいて, Conventional PCRによって検出されたNCX 1, NCLX, NCKX1, NCKX3の相対的発現量をReal-time qPCRを使って解析した.NCX1, NCLX, NCKX1および NCKX3の相対的発現量は,各々GAPDHの2% ± SE 0.5%, 0.3% ± SE 0.05%, 0.4% ± SE 0.07%および0.1% ± SE 0.05%で あった.

よびNCKX1, 2, 4の発現が検出された(図3).

 3 HGFにおけるCaCAファミリーのmRNAの相対的発 現量の比較

HGFにおいて, Conventional PCRによって検出された

17

NCX1, NCLX, NCKX1, NCKX3の相対的発現量をReal -time qPCRを使って解析した(図4). GAPDH遺伝子の ct値と, 各CaCAのct値から求めたNCX1, NCLX, NCKX1およびNCKX3の相対的発現量(平均±S.E.) は,各々GAPDHの2.0±0.5%, 0.3±0.05%, 0.4±0.07 %. 0.1±0.05%であった. またNCX2およびNCX3が発 現していないことがreal-time qPCRにおいても確認され た. この結果に基づいて細胞膜に発現するCaCAの相対 的発現量を計算すると, NCX1が76.2%で最も多く, NCKX1とNCKX3は各々17.7%と6.1%であった. また PCRにおける増幅効率は,それぞれNCX1が82.81%, NCLXが94.10%, NCKX1が86.52%, NCKX3が102.52% であった.

考 察

本研究より,HGFにおいてNCX1の発現が確認され, NCX2およびNCX3は発現していないことが明らかに なった.同じプライマーを使ったPCRにおいて,SH-SY 5YにおいてはNCX1,2,3が,HEK293FTにおいては NCX1,2の発現が検出されたことから,使用したプラ イマーに問題がないことが確認された.またHGFにおい てNCKX1およびNCKX3が発現することが初めて明らか となった.同じプライマーを使ったPCRにおいて,SH-SY5YにおいてはNCKX1,3が,HEK293FTにおいては NCKX1,2,4の発現が検出されたことから,これらの プライマーには問題がないことが確認された.

GAPDH遺伝子のct値と、各CaCAのct値からこれらの 遺伝子の相対的発現量を計算すると、細胞膜上に存在す るCaCAファミリーの76.2%をNCX1が占め、NCKX1 (17.7%)とNCKX3(6.1%)の発現量はNCX1と比較し て少ないことが明らかになった.これらの値は異なるプ ライマーによるPCRの増幅効率を考慮していないため、 厳密な発現比率を示しているわけではない、本研究で 行ったPCRにおける増幅効率は、NCX1がNCKX1や NCKX3と比較して低かったことから、実際のNCX1の割 合はより高い比率であると考えられた.NCX1は様々な 臓器にユビキタスに発現するのに対し、NCX2および NCX3は主に脳、骨格筋に発現しているとされる

(Iwamoto, 2004). これは,本研究で使用したすべての 細胞においてNCX1の発現が認められた結果とも矛盾が ない.従って,HGFの細胞膜においてNCX1がCa²⁺排出 の主要な役割を担うと考えられる.フェニトイン誘発性 の[Ca²⁺]:上昇を調べた先行研究では,フェニトインによ る[Ca²⁺]:上昇が,主にNCX阻害によるものであり,細胞 内Ca²⁺排出におけるNCKXの関与がほとんど無いことが 示唆されている (Minowa et al., 2023). 本研究の結果 は、この考えを強く支持するものである.

本研究では、HGFにおいてミトコンドリア内のCa²⁺を 細胞質に排出する主要な経路を担っているNCLXの発現 が明らかになった、細胞内小器官のなかで、 カルシウム ストアとして中心的な役割を担っているのは小胞体であ るが、ミトコンドリアもCa²⁺の取り込みおよび排出機構 を有している. ミトコンドリアへのCa²⁺の取り込みを主 に担うのは内膜上に存在するミトコンドリアカルシウム ユニポーターと呼ばれるCa²⁺チャネルである. MCUは [Ca²⁺]_iの上昇に依存して開口し、ミトコンドリアマト リックス内外の大きな電位差に従い.細胞質からミトコ ンドリア内にCa²⁺を流入させる (Baughman et al., 2011). 一方, NCLXはミトコンドリアから細胞質にCa²⁺ を排出する仕組みとして働き (Palty et al., 2010), この Ca²⁺の取り込みと放出を通じて、Ca²⁺ウエーブやオシ レーションの形成に寄与している (Ishii et al., 2006). ミトコンドリアは小胞体と近接して局在するため、小胞 体から放出されたCa²⁺がミトコンドリアに効率的に取り 込まれる (Rizzuto et al., 1998). [Ca²⁺],は、小胞体からの Ca²⁺放出と取り込み、および細胞外からのCa²⁺流入と排 出のバランスによって均衡を保っていることから. NCLXがHGFにおける[Ca²⁺]_iの調節にも関わっているこ とが推測される. ミトコンドリアから細胞質へのCa²⁺放 出に関与するNCLXの抑制は、 [Ca²⁺]_iの低下を起こすこ とが予想されるため、先行研究で示されたフェニトイン によるHGFの[Ca²⁺]_i上昇にNCLXが関与する可能性は低 いと考えられる.

本研究ではHGFにおけるNCKX5の発現は検出されな かった.同様にSH-SY5YやHEK293FTにおいてもNCKX 5の発現は検出されなかった.NCKX5は主に色素細胞で 発現すると報告されていることから(Williams et al., 2017),本研究で用いた細胞においてNCKX5は発現し ていないと考えられるが、プライマーの有効性が低かっ た可能性は否定できない.NCKX5は,他のNCKXファ ミリーメンバーとは異なり細胞表面では発現せず、ゴル ジ体に関連する細胞内膜で発現していると報告されてい ることから(Ginger et al., 2008)、フェニトインによる HGFの[Ca²⁺],上昇に寄与する可能性は低いと考えられ る.

本研究では、HGFにおいて細胞膜上に存在するCa²⁺排 出機構として、NCX1、NCKX1、NCKX3の3種類の CaCAが発現していることが明らかとなった. その中 で、NCX1が主要なCa²⁺排出機構と考えられた. しかし 現時点では、NCXとNCKXの抑制におけるフェニトイン の特異性やサブタイプの選択性は不明である.また DIGOなど病的な条件において、NCKXの発現比率が変 化する可能性も考えられる.フェニトインの特異性およ びサブタイプの選択性や、病態とNCXおよびNCKXの発 現パターンの解析は、DIGOの発症メカニズムの解明に 向けた今後の研究に重要と考えられる.

結 語

本研究により、HGFにおいてNCX1、NCLX、NCKX 1、NCKX3が発現していることが明らかとなった. その なかでも、細胞膜上のCa²⁺排出機構としてはNCX1が大 部分を占めており、フェニトインによって生じる[Ca²⁺]_i の上昇はNCX1を阻害することに起因している可能性が 示唆された.

謝 辞

本研究は、令和5年度科学研究費助成事業(若手研 究)23K16190および、2020年北海道医療大学歯学会研 究奨励金によって遂行されました.この場を借りて深く 御礼申し上げます.

文 献

- Bagur R, Hajnóczky G. Intracellular Ca²⁺ sensing : its role in calcium homeostasis and signaling, Mol cell 66 (6), 780–788, 2017.
- Baughman JM, Perocchi F, Girgis HS, Plovanich M, Belcher–Timme CA, Sancak Y, Bao XR, Strittmatter L, Goldberger O, Bogorad RL. Integrative genomics identifies MCU as an essential component of the mitochondrial calcium uniporter, Nature 476(7360), 341–345, 2011.
- 3) Berridge MJ. Inositol trisphosphate and calcium signalling mechanisms, Biochim Biophys Acta–Mol Cell Res 1793(6), 933–940, 2009.
- 4) Brini M, Carafoli E. The plasma membrane Ca²⁺ AT-Pase and the plasma membrane sodium calcium exchanger cooperate in the regulation of cell calcium, Cold Spring Harb Perspect Biol 3(2), a004168, 2011.
- 5) Brown RS, Arany PR. Mechanism of drug-induced gingival overgrowth revisited : a unifying hypothesis. Oral Dis, 21(1), e51–61, 2015.
- 6) Clapham DE. Calcium signaling, Cell 80(2), 259–268, 1995.
- 7) Clapham DE. Calcium signaling, Cell 131(6), 1047– 1058, 2007.

- 8) Cockcroft S. The latest phospholipase C, PLCη, is implicated in neuronal function, Trends Biochem Sci 31 (1), 4–7, 2006.
- 9) Ginger RS, Askew SE, Ogborne RM, Wilson S, Ferdinando D, Dadd T, Smith AM, Kazi S, Szerencsei RT, Winkfein RJ. SLC24A5 encodes a trans–Golgi network protein with potassium–dependent sodium–calcium exchange activity that regulates human epidermal melanogenesis, J Biol Chem 283(9), 5486–5495, 2008.
- Hassan MT, Lytton J. Potassium-dependent sodiumcalcium exchanger (NCKX) isoforms and neuronal function, Cell Calcium 86, 102135, 2020.
- Hassell TM. Evidence for production of an inactive collagenase by fibroblasts from phenytoin-enlarged human gingivae, J. Oral Pathol. 11(4), 310–317, 1982.
- 12) Hattori T, Ara T, Fujinami Y. Pharmacological evidences for the stimulation of calcium–sensing receptors by nifedipine in gingival fibroblasts. J Pharmacol Pharmacother, 2(1), 30–35, 2011.
- 13) Hattori T, Ara T, Fujinami Y. Pharmacological evidence for the involvement of calcium entry through TRPV1 channels in nifedipine–induced [Ca²⁺]i elevation in gingival fibroblasts, Pharm. Pharmacol 3(04), 427– 432, 2012.
- 14) Hattori T, Nakano K, Kawakami T. Phenytoin–Induced Elevation of the intracellular calcium concentration by stimulation of calcium–sensing receptors in gingival fibroblasts, Sci Res 4–2, 261–265, 2013.
- 15) Hattori T, Wang P–L. Elevation of cytosolic calcium level triggers calcium antagonist–induced gingival overgrowth, Eur J Pharmacol 583(1), 37–39, 2008.
- 16) Ishii K, Hirose K, Iino M. Ca²⁺ shuttling between endoplasmic reticulum and mitochondria underlying Ca²⁺ oscillations, EMBO rep 7(4), 390–396, 2006.
- 17) Iwamoto T. Forefront of Na⁺/Ca²⁺ exchanger studies : molecular pharmacology of Na⁺/Ca²⁺ exchange inhibitors, J Pharmacol Sci 96(1), 27–32, 2004.
- 18) Kantarci A, Augustín P, Firatli E, Sheff MC, Hasturk H, Graves Dana T, Trackman Philip C. Apoptosis in gingival overgrowth tissues, J Dent Res 86(9), 888– 892, 2007.
- 19) Kantor ML, Hassell TM. Increased accumulation of sulfated glycosaminoglycans in cultures of human fibroblasts from phenytoin-induced gingival overgrowth, J Dent Res 62(3), 383–387, 1983.

- 20) Kataoka M, Kido J–I, Shinohara Y, Nagata T. Drug– induced gingival overgrowth—a review, Biol Pharm Bull 28(10), 1817–1821, 2005.
- Kimball OP. The trealment of epilepsy with sodium diphenyl hydantoinate, J Am Med Assoc 112(13), 1244–1245, 1939.
- 22) Leybaert L, Sanderson Michael J. Intercellular Ca²⁺ waves : mechanisms and function, Physiol Rev 92(3), 1359–1392, 2012.
- 23) López–González MJ, Luis E, Fajardo O, Meseguer V, Gers–Barlag K, Niñerola S, Viana F. TRPA1 channels mediate human gingival fibroblast response to phenytoin, J Dent Res 96(7), 832–839, 2017.
- 24) Lytton J, Li X-F, Dong H, Kraev A. K*-dependent Na*/ Ca²⁺ exchangers in the brain, Ann NY Acad Sci 976(1), 382–393, 2002.
- 25) Minowa E, Hayashi Y, Goh K, Ishida N, Kurashige Y, Nezu A, Saitoh M, Tanimura A. Enhancement of receptor-mediated calcium responses by phenytoin through the suppression of calcium excretion in human gingival fibroblasts, J Periodontal Res 58(2), 274–282, 2023.
- 26) Modéer T, Brunius G, Mendez C, Juntti-Berggren L, Berggren P-O. Influence of phenytoin on cytoplasmic free Ca²⁺ level in human gingival fibroblasts, Eur J Oral Sci 99(4), 310–315, 1991.
- 27) Ogata Y, Nakao S, Shimizu E, Matsuda-Honjyo Y, Yamazaki M, Furuyama S, Sugiya H. Tyrosine phosphorylation is involved in Ca²⁺ entry in human gingival fibroblasts, Cell Biol Int 27(8), 689–693, 2003.
- 28) Palty R, Silverman WF, Hershfinkel M, Caporale T, Sensi SL, Parnis J, Nolte C, Fishman D, Shoshan–Barmatz V, Herrmann S. NCLX is an essential component of mitochondrial Na⁺/Ca²⁺ exchange, Proc Natl Acad Sci USA 107(1), 436–441, 2010.
- 29) Pfeilschifter J, Rüegg UT. Cyclosporin A augments angiotensin II-stimulated rise in intracellular free calcium in vascular smooth muscle cells, Biochem J 248(3), 883 -887, 1987.
- 30) Rizzuto R, Pinton P, Carrington W, Fay FS, Fogarty KE, Lifshitz LM, Tuft RA, Pozzan T. Close contacts with the endoplasmic reticulum as determinants of mitochondrial Ca²⁺ responses, Science 280(5370), 1763– 1766, 1998.
- 31) Rogawski MA, Löscher W. The neurobiology of an-

tiepileptic drugs, Nat Rev Neurosci 5(7), 553-564, 2004.

- 32) Sabarudin MA, Taib H, Wan Mohamad WM. Refining the mechanism of drug-influenced gingival enlargement and its management. Cureus, 14(5), e25009, 2022.
- 33) Sano M, Ohuchi N, Inoue T, Tono K, Tachikawa T, Kizawa Y, Murakami H. Proliferative response to phenytoin and nifedipine in gingival fibroblasts cultured from humans with gingival fibromatosis, Fundam Clin Pharmacol 18(4), 465–470, 2004.
- 34) Shigekawa M, Iwamoto T. Cardiac Na⁺-Ca²⁺ exchange : molecular and pharmacological aspects, Circ Res 88 (9), 864–876, 2001.
- 35) Somlyo AP, Himpens B. Cell calcium and its regulation in smooth muscle, FASEB J 3(11), 2266–2276, 1989.
- 36) Tanaka N, Morita T, Nezu A, Tanimura A, Mizoguchi I, Tojyo Y. Signaling mechanisms involved in protease –activated receptor–1–mediated interleukin–6 production by human gingival fibroblasts, J Pharmacol Exp Therap 311(2), 778–786, 2004.
- 37) Tanimura A, Matsumoto Y, Tojyo Y. Polarized Ca²⁺ release in saponin permeabilized parotid acinar cells evoked by flash photolysis of 'caged' inositol 1, 4, 5– trisphosphate, Biochem J 332(3), 769–772, 1998.
- 38) Wiegert JS, Bading H. Activity-dependent calcium signaling and ERK-MAP kinases in neurons : a link to structural plasticity of the nucleus and gene transcription regulation, Cell Calcium 49(5), 296–305, 2011.
- 39) Williams RM, Winkfein RJ, Ginger RS, Green MR, Schnetkamp PP, Wheeler GN. A functional approach to understanding the role of NCKX5 in Xenopus pigmentation, PloS One 12(7), e0180465, 2017.
- 40) Yamashita M, Katsumata M, Iwashima M, Kimura M, Shimizu C, Kamata T, Shin T, Seki N, Suzuki S, Taniguchi M. T cell receptor–induced calcineurin activation regulates T helper type 2 cell development by modifying the interleukin 4 receptor signaling complex, J Exp Med 191(11), 1869–1880, 2000.